

|||||
卒業論文要旨
|||||

野川における都市河川の再生について

青井千佳

1. 目的と方法

野川は、国分寺市恋ヶ窪に端を発し、国分寺崖線（ハケ）沿いに東南に流下して世田谷区二子橋下で多摩川に合流する、延長約20kmの中小河川である。ハケの裾から湧き出る湧水と、流域の生活排水を主な水源としている。1960年代以後、流域人口の増加等による汚濁が深刻となり、一時は多摩川最大の汚濁源とまで言われた。その後、多摩川浄化対策に基づく流域下水道の整備が進み、水質は改善傾向にあるが、一方で流量の減少という新たな問題をかかえる。

都市河川としての野川の特徴は、河川沿いに比較的自然が残されていることである。そのため、他の都市河川に比べ、野川は再生される可能性が高い、と考えられる。ここでは再生された河川を、大多数の住民がきれいだと感じる水質、豊かな水量、住民生活と関わりを持つ生きた水辺、の3つを合わせ持つ河川、とした。

本論文は、この中から水質と住民生活との関わり方の二点を取りあげ、野川再生の可能性について考察することを目的とする。また、方法として、最も水質の悪い上流域における水質調査、東京都の水質自動観視システムのデータを利用した時間変動の解析、流域住民へのアンケート調査等を行った。

2. 結果

まず水質面だが、野川の水質は確かに改善されつつあり、上流域も国分寺市の下水道整備に伴い浄化が進んでいる。しかし流量の減少は著しく、そのため冬には水質が悪化する傾向がみられる。また、中流では藻類の繁殖が著しく、夏は日中、DOが過飽和状態となることがある。

住民への意識調査の結果、住民の大部分は野川に関心と愛着を持っていることがわかった。しかしその度合には個人差があり、野川近辺に長く居住し、湧水等に詳しい、年輩の人ほど野川に愛着を持っている、という傾向がみられた。

人々の望む野川は、予想通り水辺に親しめる自然の川、というのが圧倒的であったが、実際に野川と関わりを持って生活している人は、ごく少数である。しかし野川公園等では、河川と積極的に関わりを持とうとする人がかなりおり、自然に親しめる場の重要性が確認された。

野川の再生は、流量の問題・湧水の枯渇など難しい面があり、行政の力だけで解決するのは不可能と思われる。野川が再生されるか否かは、今後の流域住民の地域運動にかかっている、と言えるのではないかと。

見沼代用水と灌漑地域の土地利用

朝川千津子

1. 研究の目的と方法

本研究は、見沼代用水の水利用の変遷と、用水によって灌漑される地域の用水利用と土地利用の変遷・特徴を明らかにすることを目的としている。灌漑地域には、下流域にある見沼田圃を選んだ。

2. 要旨

享保12年（1727）幕府は新田開発と用水の安定

確保を目的として、川口市を中心とする荒川沿岸水田地帯を灌漑していた見沼溜井を干拓し、見沼代用水を開削した。この見沼溜井跡の新田が見沼田圃である。見沼代用水は見沼の代わりの用水という意味がこめられている。

江戸時代を通して、見沼代用水は幕府の直轄用水となり大事に保護されてきた。水利においても他用水に優先して配水され、増水干ばつ時でも平

均水量が保たれるよう配慮された。この水利慣行は、明治以降もずっと続いた。用水内では、下流域が本来は不利な条件にあるにもかかわらず比較的優遇されていた。下流域に幕領が集中し、また旧見沼溜井の既存水利権を守らねばならぬ背景があったためであると思われる。しかし、明治時代となり代用水路が民営化されるに伴い、この上流と下流の立場が逆転する。用水費の負担金にも大幅な格差ができ、下流域の発言力は弱まった。戦後になってようやく格差がなくなり、水利が民主化した。

明治30年代から見沼代用水域では陸田が発達し、用水の盗水が相次いだ。水不足は他用水に比べると深刻ではなく局地的な対処にとどまった。これも、見沼代用水が歴史的に優遇された水量豊富な用水であったからである。

見沼田圃は、見沼代用水の下流域にあたり首都圏20～35kmに位置しながら、1200haにも及ぶ緑の空間となっている。これは、見沼代用水から直接きれいな水を取水できたことによるところが大きい。見沼溜井干拓後、約2世紀にわたって水田単作地として利用されてきたが、ここ10余年間で、土地利用が全く変貌してしまった。従来は蓄力利用もできない湿田で摘み田が行われ、生産性も低かった。昭和40年代後半から土地改良事業が実施され、周辺台地の農地が遺棄していくなかで、見沼田圃は農地の中心としての役割を果たすように

なり、今では台地から押し出された野菜、植木類の栽培が中心となっている。

しかし、見沼田圃は、成立課程からみても各農業集落からの出作地帯として位置づけられ、各農家の所有面積も平均約0.4haと少ない。しかも、各場所に分散しており、農地は連続しているが、各地権者の思惑は農地一筆ごとに分散しており、統一意見が生まれにくい。耕作放棄地も多く、営農環境を悪化させる要因となっている。現在、植木畑が増加しているが、植木は不景気で、単なる農地保全の手段としての利用でしかなく、潜在的な不耕作地はかなりあるように思われる。

こうしたなかで、見沼田圃の農地転用を規制してきた見沼三原則に対する反発が強くなり、画一的な規制も限界に達したようだ。今まで遊水機能確保が最優先で農業が犠牲となることが多かった。一方、周辺住民の見沼田圃への愛着が強く、今後の調整が難しくなっている。

見沼田圃では、畑地化により用水の余剰水がたたにもかかわらず、水利権は従来そのまま、水を無駄に流失している状態にある。現在、見沼代用水では上水道用水への転用事業が行われている。農業用水はすでに独自で運営していくのは難しい。農業用水も都市用水の援助を受けながら、互いに競合していく時代になったようである。しかし、農業用水側の水利権の確執が大きく、転用には障害が多々あり、大幅な転用がしにくいようだ。

町田市における住宅地形成

石 黒 洋 子

1 研究の目的と方法

大都市東京への人口、諸機能の著しい集中により、過密化が生じ、その反作用として、近郊農村地域に著しい都市化をもたらした。町田市もその急激な都市化にみまわれた都市の1つであった。

本研究では、急激な都市化に伴い、町田市において住宅地域がどのように形成されてきたのか、その形成過程を町田市全体でみると共に、特にその中から高級住宅地を取り上げて、その形成について考察していくことにする。

研究の方法としては、文献調査、統計調査、聞

きとり調査等を行い、その結果を分析、考察する。

2 要旨

昭和30年代前半まで町田市は緑に囲まれた近郊農村であったが、市制施行・首都圏整備法による市街地開発区域指定に伴い、急激な都市化にみまわれた。その都市化は、町田市の地理的な位置上東京西郊の中での都市化であると同時に、東京南郊つまり神奈川県都市化とも密接な関わりを持っていた。

町田市では急激な都市化に伴い、人口が急増し